パスカルの《アポロジー》のプラン復元に関して（XXIX）

竹　下　春　日

≪アポロジー≫の解説（第Ⅱ部）

Ⅰ　序説（A）

（一）　われわれは XXI～XXVIII 回に汎って，パスカルの≪アポロジー≫の概要の解説を行って来た。この際解説は，推定しえた章順序に従って行われて来たが，これは謂わば各章の内容及び章間の連関を解明することに，重点が置かれていた。この解説は，≪アポロジー≫解明のためには必須のものであるが，十分ではない。その理由は，次の如くである。

パスカルは，或る章において問題を提起した場合，この問題の解答ないし解決を特定の章において全面的に行っているわけではない。彼は非常にしばしばこの解決に資するデータの一部づつを，数章に汎り，連続的ないし非連続的に散在せしめているのである。したがってわれわれは，これらデータを綜合統一することによって，始めて該問題の十全なる解決を入手しうるのである。しかしこれらのデータの各部分の見出される数章は，複数のテーマを扱う多彩なる叙述を含むのが，パスカルの場合普通である。これは当時の学術的論述形式と敢えて異る叙述を試みようとするパスカルの意図によるものである。換言すれば，読者の興味を刺戟するための手段であり，パスカルはモンテーニュの≪話題から話題へと飛びながら……≫ en sautant de sujet en sujet[1] という叙述方法を，モデルにしておるのである。

（二） 扨てかように，パスカルがテーマにかんする叙述の各部分を数章に配分したのも，彼の常套手段たる≪漸層法≫ gradation を用いるのに，便利だからであるが，われわれは前回迄行って来た解説を（第Ⅰ部）として，今回及び次回の解説（第Ⅱ部）と形式上区別したい。

解説の（第Ⅰ部）は，各章の内容及び連関を展望しうるが，問題解決の全面的体系的理解を，多かれ少かれ困難にしている。これに反し，解説（第Ⅱ部）は，問題及びその解答の全体的把捉を可能にしているが，各章内部の展望，章順序及び章間の脈絡は，不明瞭ならざるをえない（かかる不備は，パスカルの著作の未完成の為めであり，完成の場合には，かかる説明の不完全は解消した事であろう）。それゆえ，これら二つの解説は，その役割上相補的関係にあると，言い得るのである。以上が，二個の解説を必要とする理由である。

（三） 最後に，次の事を附記して置きたい——われわれが，≪アポロジー≫を構成する諸断章を通読するとき，芸術・政治・学問・習俗等様々の文化の諸領域にかんし，大小さまざまの問題とこれに対する解釈，回答，感想が，パスカルにより述べられているのを知るのであるが，われわれはわれわれの叙述を，次の如く限定したい。即ちわれわれは，≪アポロジー≫の内容上——宗教的哲学的及び神学的意味において——極めて重要なる意義を有する諸問題のみを，而してその解決，回答が如何にして行われているかを，この解説（第Ⅱ部）に於いて，取扱うことに努め度い。

Ⅱ 二つの問題

（一） パスカルは，≪アポロジー≫の問題提起の準備として，人間存在の≪本性≫ nature を提示している。彼によれば，この本性なるものの一つは，≪悲惨≫ misère である。そうして悲惨の主観的理由は，人間が自己を惨めと自覚するからであり，この自覚は，原罪以後人間に残された≪本能≫ instinct[2]——≪創造主のおぼろげな光≫ une lumiere confuse de son auteur[3] によって，≪最初の本性の幸福≫ le bonheur de leur première nature[4] と現状とを，意識的ないし無意識的に比較することによって，生じた

ものである。

（二）　玆において人間は，惨めさの意識の結果，絶望に陥り，≪永遠に不幸である≫ être éternellement malheureux[5] 道を辿るのでなければ，悲惨からの脱出を意図する外はない。而して悲惨からの脱出とは，悲惨の反対物たる≪幸福≫を志向することを，意味する。ここにおいて幸福とは，≪真の幸福≫ le vrai bien——≪至福（最高善）≫ le souverain bien (La.305-Br.462) とは何か，という「幸福の本質論」が，提起されるのである。

（三）　ところでこの場合，かかる幸福の追求としての惨めさからの脱出は，宗教的に見て，二つの仕方がありうる。即ち，自力で悲惨から脱出するか，自力の無力を自覚してその極絶対者に依存して脱出するか，である。前者は，パスカルの立場から見るとき，神を無視する傲慢のあり方であり，神によって打ち拉がれることは，必定である。そもそも原罪に対する神の刑罰が，神に対する反逆（アダムとエヴァの）の人間的高慢さを打ち砕くものであり[6]，前出の≪永遠の不幸≫の道を辿るということ自体も，神を求めようとしないという消極的にせよ，神を否定する人間の傲慢さに対する刑罰の意味を持つものである——≪……，全心で神を求めている人たちには明らかに現われ，全心で神を避けている人たちには隠れようとのぞまれたため，神は，神についての認識を加減して，神のしるしを，神を求めている人たちには見うるように，求めていない人たちには見えないように，お与えになったのである。≫ (La. 309-Br.430 (10°章))。而してかかる神こそは，パスカルの所謂≪隠れたる神≫ Dieu caché に外ならない。

（四）　以上の事情に徴して，われわれは，神を求め神を信ずる道——キリスト教の道[7] こそが，≪至福≫に到る唯一の道であることを，知るのであるが，「では如何にすれば，かかる至福なるものを実現しうるであろうか」。かくして実践的具体的方法の問題が，当然登場して来るのである。

以上（二）及び（四）により，二個の問題——幸福の本質論と至福への実践的方法論とが，≪アポロジー≫において提起されておることを，われわれは知るのである。

Ⅲ　問題への回答

（一）　幸福（至福）の本質論――パスカルの≪至福≫にかんする意見は，次の諸断章の説くところによって，明白である――≪真の善の探求。／普通の人々は善を，財産や外的な幸福や少なくとも気ばらしのうちに置く。／哲学者たちは，すべてそれらのむなしさを示し，彼らの置きうる場所に善を置いた。≫（La. 305-Br. 462 (14°章)），≪解放者に諸手をさし出すようになるために，真の善の無益な探求で倦ませられ，疲らせられるのはよいことである。≫（La. 306-Br. 422 (14°章)），≪キリスト者の神は，神が魂の唯一善であること，魂の十全な平安は神のうちにあること，魂の唯一の喜びは神を愛するにあることを，魂に感じさせる神である。≫（La. 302-Br. 544 (14°章)）。

（二）　至福に到るべき実践的方法論――（a）≪理性の服従≫の必要性を認識すること（La. 355-Br. 268 (18°章)，La. 369-Br. 811 (18°章)）。（b）心の渇きを以って真理を求め，聖書を調べること（La. 356-Br. 696 (18°章)）。（c）≪習慣≫を利用すること（La. 7-Br. 252 (13°章)，La. 722-Br. 250 (20°章)）。（d）真の信仰者のあり方を心得ること（La. 731-Br. 286 (29°章)，La. 732-Br. 287 (29°章)，La. 728-Br. 470 (29°章)）。

これらのうち（a）と（c）に就いて，パスカルはそれぞれ次の如く述べている。

（a）に就いて――≪理性の最後の歩みは，理性を超えるものが無限にあるということを，認めることである。それを知るところまで行かなければ，理性は弱いものでしかない。……≫（La. 369）。（c）に就いて――≪……習慣は自動機械〔身体〕を傾けさせ，自動機械は精神を知らず知らずに引きずっていく。明日はくるだろう，またわれわれは死ぬだろうということを，いったいだれが証明したであろう。それなのに，それ以上よく信じられていることがあるだろうか。したがって，習慣がわれわれにそのことを納得させたのである。……精神がひとたび真理がどこにあるのかを見た場合にも，……われわれをその信仰で染めあげるために，この習慣の助けを借りなければならないのである。≫

(La. 7)。

Ⅳ　第3の問題

（一）　パスカルは，人間本性の一つとして≪悲惨≫を挙示したが，次に彼はこれに対立する第二の本性として，人間の≪偉大さ≫ grandeur を，提示している――≪人間の偉大さは，人間が自分の惨めなことを知っている点で偉大である。樹木は自分の惨めなことを知らない。／だから，自分の惨めなことを知るのは惨めであることであるが，人間が惨めであることを知るのは，偉大であることなのである。≫（La. 218-Br. 397（7°章）），≪人間は明らかに考えるために作られている。それが彼のすべての尊厳，彼の価値のすべての価値である。≫（La. 226-Br. 146（7°章）），≪考えが人間の偉大さをつくる。≫（La. 233-Br. 346（7°章））。

以上により，人間存在の偉大さは思考にあることが了解されるが，この際≪考えること≫ pensée とは，≪理性≫のみならず，パスカルの所謂≪心情≫（cœur の働きをも含む，内面的に多様かつ深遠なる認識作用を，意味するものである[8]。

（二）　第3の問題――既述のごとく，パスカルは人間本性の一つを，≪悲惨≫と規定した（Ⅰの（一））。而して他方において，人間本性を≪偉大≫としている。かくして人間存在の相反する本性が，提示され，ここにこの対立した≪現象の理由≫ Raison des effets（9°章）が，問われることになるのである。

Ⅴ　問題への回答

（一）　人間の側に即した，≪対立（矛盾）≫ contrariétés にかんする説明。15°章中の La. 285-Br. 525には，次の叙述が見られる――≪自然から生じうるのではなく，改俊から生じる卑下の動き，そこに留まるためでなく，偉大に到るための卑下の動きが，必要である。功徳から生じるのでなく，恩恵から生じる偉大の動き，しかも卑下を通過した後の偉大の動きが，必要である。≫（強調点は論者，以下同様）。この fr. 中の≪偉大に到るための卑下の動き≫とは，

Ⅳにおける広義の思考作用により，前出（Ⅱの（三））の「自力の無力を自覚して，改めて絶対者に依存して〔悲惨から〕脱出する」ことと，意味内容において同義である。それゆえ≪偉大に到る≫とは，人間（アダムとエヴァ）の過去における偉大な状態――≪多大の栄光を担≫[9] っていた時の，≪神の威容を視ていた≫[10] 時の，而して≪清く，罪なく，完全≫[11] な，そうして≪光と知性とで満≫[12] されていた時の状態（至福の状態）に立ち戻ること，ないしこの状態に近づくことを，意味している。即ち人間が，神に対する純粋かつ確かなる信仰へと復帰することに外ならない。かくして人間の≪偉大≫とは，詳しくは神への信仰を取り戻そうと実存的に決意すること，及び取り戻したところの実存状況ならびに取り戻しうるという実存の根本的可能性そのものを，包括的に意味するものである。

以上が，≪悲惨≫と≪偉大≫との両立が，いかにして生起したか，という問題への回答である。この回答は，何故こうした矛盾した現象が存在するかという，≪現象の理由≫解明のための予備的補助的説明として，不可欠のものである。

（二）　神の立場に即した説明。≪悲惨≫と≪偉大≫の併存という矛盾した現象の究極の理由をなすものは，人間の原罪と幸福への欲求と，神による刑罰及び神の愛にもとずく救済意志（恩寵）とである。先づ神は人間の原罪に対して罰を与えたにもかかわらず，≪創造主のおぼろげな光≫を，人間に与えたのであり（註３），≪真理≫と≪幸福≫を望むという≪この欲求がわれわれに残されているのは，われわれを罰するためであると同時に，われわれがどこから堕ちたかを感じさせるためである。≫[13] 既に神の≪恩恵から生ずる偉大の動き≫が，示されているが（Ⅴの（一）），次の二断章は問題解決のため極めて重要なる意義を有するものである――≪相反のみなもと（Source des contrariétés）。十字架で死ぬまでへりくだった神。自分の死によって，死にうち勝ったメシア。イエス・キリストにおける二つの本性，二つの来臨，人間の本性の二つの状態（deux états de la nature de l'homme）。≫[14]，≪悲惨は絶望を引き起こす。／高慢はうぬぼれを引き起こす。／神の子が人となられたことは，

人間が必要とした救いの偉大さによって，人間の悲惨の大いさを人に示すものである。≫[15] これらの断章中の≪イエス・キリストにおける二つの本性，二つの来臨≫ deux natures en Jésus-Christ, deux avènements とは，イエス刑死の悲惨と愛の偉大及びイエスの来臨と復活とを意味するものであり，而して後者の fr. が，神の恩恵の偉大と人間悲惨の甚大との密接な相関を示すものであることは，言う迄もない。かくして大いなる悲惨から人間が脱出しうることは，まことに人間の≪偉大さと栄光との動き≫ les mouvements de grandeur et de gloine を示すものであるが，これは直ちに神の愛にもとずく恩寵の偉大を，証するものに外ならないのである。即ち≪イエス・キリストにおける二つの本性，二つの来臨≫は，≪人間の本性の二つの状態≫に相関照応しておるのである。

最後にわれわれは，次のごとく以上を再言することが出来る——神は人間の原罪に対して刑罰を課し，その結果として人間の悲惨という状態が生起した。しかし神の意図するところは，人間をたんに悲惨の裡に放置することではなく，彼の悲惨を彼自身に意識せしめることである。なぜなら，人間は自己の惨めさを自覚することによって，真に惨めとなるからである[16]。だが，神が人間の悲惨を彼自身に意識せしめるのは，彼をたんに絶望の渕に落とし入れる為めではなく，この悲惨の自覚を媒介して，神の許へ立ち返えらせようとする為めである。そうしてこの「神の許へ立ち返えらせようとする」神自身の意図の実現が，まさにイエス・キリストの≪来臨≫ l'avènement に外ならないのである。

以上が，人間本性の≪悲惨≫と≪偉大≫の矛盾にかんするパスカルの神学的理論的説明である[17]。これにより，なぜ叙上の如き矛盾対立が生じえたかという≪現象の理由≫が，明瞭に提示されたのである。

註

1) La. 48–Br. 62（≪第1部序言≫）。断章番号の後のカッコ内の数字は，われわれによる≪アポロジー≫の章番号を示している（以下同様）。

2) ・3) ・4) ——La. 309–Br. 430（10°章）。

5) La. 11–Br. 194（18°章）。

6) La. 309–Br. 430の擬人法的叙述中で，≪神の知恵≫は，人間に対し，次のごと

く述べている——≪「だが，彼〔人間〕はこれほどまでの栄光を，思い上がりに陥らないでは保つことができなかったのである。彼は，自分で自分の中心となり，私〔神〕の助けから独立しようと欲した。彼は，私の支配からのがれ出た。そして，自分のなかに幸福を見いだそうとの欲求によって，自分を私と等しいものとしたので，私は彼をそのなすがままにまかせた。そして，それまで彼に従っていたもろもろの被造物をそむかせ，彼の敵とした。……」≫

7) キリスト教の基本理念の正当性・優越性にかんする，キリスト教徒にとっては常識的な，しかし無神論者等に対しては必要な（啓蒙的意味において）補足的説明が，大略13°≪本性の堕落≫，15°≪哲学者たち≫，16°≪他宗教の虚偽≫，17°≪愛すべき宗教≫，19°≪宗教の基礎と反論への回答≫，20°≪キリスト教の道徳≫の諸章において，展開されている。

8) XXI 回の7°≪偉大さ≫の IV 参照。

9) ・10) ・11) ・12) ——La. 309–Br. 430 (10°章)。

13) La. 125–Br. 437 (13°章)。

14) La. 448–Br. 765 (19°章)。

15) La. 668–Br. 526 (20°章)。

16) La. 129–Br. 399 (3°章) ——≪感じることがなければ惨めではない。こわれた家は惨めではない。惨めなのは人間だけである。……≫。

17) この神学的理論的説明が，パスカル弁証法の論理によって貫かれていることは，既に述べられた如くである（拙論 XXI 回の15°≪哲学者たち≫，p. 306—307参照)。

（XXIX回了）